（9 月 29 日）「ルカによる福音書 22：1～6」
しかし、十二人の中の一人で、イスカリオテと呼ばれるユダの中に、サタンが入った。
（ルカによる福音書 22 章 3 節）

・ユダは本当にイエス様が殺されるのを望んでいたのでしょうか。聖書にはユダはイエス様を「引き渡そう」としていたとあります。過越祭の期間、エルサレムは人で一杯になります。その期間だけでもイエス様が逮捕され、留置場に入っておいて欲しいと願ったのでしょうか。
・しかしこの「引き渡す」という言葉は、ギリシア語では「裏切る」と同じ単語です。お金をもらってイエス様を引き渡すこと、それはイエス様を裏切ることであり、イエス様を十字架の死に向かわせることなのです。
・聖書は「ユダの中にサタンが入った」と書きます。荒れ野の誘惑も、神さまがイエス様を荒れ野に導き、サタンと対峙させました。この場面もユダという人間の思いではなく、神さまの大きな計画があり、サタンを用いたということなのでしょうか。

（9 月 30 日）「ルカによる福音書 22：7～13」
すると、席の整った二階の広間を見せてくれるから、そこに準備をしておきなさい。
（ルカによる福音書 22 章 12 節）

・過越祭には大勢のユダヤ人がエルサレム神殿を訪れました。成人男子のユダヤ人は必ず行かなければならなかったのです。そのため道は混雑するし、宿は一杯だし、食事をする場所さえもままならなかったかもしれません。
・そのときイエス様は、ペトロとヨハネに不思議なことを告げます。出会った人についていけば、そこに席が整えられているというのです。イエス様はあらかじめ、こっそり話をつけていたのでしょうか。
・そうではないと思います。すべての出来事が神さまの計画の中にあるということを、聖書は伝えているだと思います。この食事は、わたしたちが教会で大切にしている「主の晩餐」です。その席が神さまによって備えられたということ、そこに大きな意味があるのです。

福　音　書　通　読

9 月

（9 月　1 日）「ルカによる福音書 14：7～14」
そうすれば、その人たちはお返しができないから、あなたは幸いだ。正しい者たちが復活するとき、あなたは報われる。
（ルカによる福音書 14 章 14 節）

・礼拝堂ではしばしば、入り口近くの席が大人気になることがあります。「末席」を求めてみんなが殺到するのか、あるいは説教壇からできるだけ離れたいという心理なのか、それはよくわかりません。
・他の人の尊敬の目を集めたいという思いで上席に座ろうとするならば、その思いは神さまに否定されるということをイエス様は言われているのでしょう。ただし神さまの元に少しでも近づきたいという思いで礼拝堂の前の席を選ぶことは、きっと喜ばれると思います。
・さらにイエス様は、催しへの誘いについても語られます。わたしたちは人にしたことはしっかり覚え、人にしてもらったことは忘れがちです。逆でありたいですね。つまり、人にしたことはすぐに忘れても、人からしてもらったことはいつまでも覚えておきたいものです。

（9 月　2 日）「ルカによる福音書 14：15～24」
主人は言った。「通りや小道に出て行き、無理にでも人々を連れて来て、この家をいっぱいにしてくれ。」　（ルカによる福音書 14 章 23 節）

・聖書を見ると、この物語と同じような物語がマタイ 22：1～10 に書かれています。しかしよく見ると、二つの物語には決定的な違いがあります。それはマタイでは「婚礼の祝宴」なのに対し、ルカは「大宴会」となっているところです。
・いくらなんでも婚礼の祝宴の招待を受けたのに理由をつけて断るのはダメだけれども、大宴会だったらいいのではないか、とも思います。それも仮病やウソではなく、ちゃんとした理由があるのですから。
・しかし逆に考えてみると、わたしたちに対する神さまからの招きは一見大したことのないことのように見えても、とても大切なものだということかもしれません。扉が閉められた後にいくら悔やんでも、遅いのです。

（9 月 27 日）「ルカによる福音書 21：20～28」
エルサレムが軍隊に囲まれるのを見たら、その滅亡が近づいたことを悟りなさい。
（ルカによる福音書 21 章 20 節）

・エルサレム神殿が崩壊したのは紀元 70 年、イエス様の十字架の死から 37 年ほど後のことでした。そしてルカ福音書が書かれた頃には、すでにエルサレム神殿は崩壊していました。
・この福音書を読んだ人たちは、神殿が破壊されたときのことを思い起こしていたでしょう。エルサレム神殿はユダヤ人にとって、とても大切な場所でした。神殿の崩壊は、ユダヤ人の滅亡を意味するとも思われていました。
・しかし神殿がなくなったことによって、反対にイエス様の福音が世界中に広がることになったのです。祭儀宗教から解放され、それぞれの場所で集まり、祈り、賛美する教会へと変わっていくのです。

（9 月 28 日）「ルカによる福音書 21：29～38」
放縦や深酒や生活の煩いで、心が鈍くならないように注意しなさい。さもないと、その日が不意に罠のようにあなたがたを襲うことになる。
（ルカによる福音書 21 章 34 節）

・いちじくの木を見ても、人それぞれ感じることは違います。夏が近いと感じる人、今年は実をたくさんつけそうだと感じる人、そろそろ切った方がいいと感じる人。神の国の訪れも、同じしるしを見ても感じる人、感じない人がいるのでしょう。
・イエス様の言葉に聞き、神さまの約束を心に留め日々を過ごすとき、神の国は必ずわたしたちの元にやってくるのだと思います。その確信をいつも心に持ちながら、歩んでまいりましょう。
・34 節には「放縦や深酒や生活の煩いで」とあります。ここを読むたびに「放縦って何だろう？」と思っていました。新しい聖書は「放縦や深酒」を、「二日酔いや泥酔」と訳しています。「ああ、なるほどね」と思ったのは、わたしだけではないと思います。

（9 月 25 日）「ルカによる福音書 21：1～6」
イエスは目を上げて、金持ちたちが賽銭箱に献金を入れるのを見ておられた。
（ルカによる福音書 21 章 1 節）

・この箇所を見て、「そうか、イエス様もみんなの献金が気になるんだ。じゃあ牧師が気になっても仕方ないな」と思ってしまいましたが、当時の賽銭箱は近くでじっくり見なくても、大体の献金額がわかるような工夫がしてありました。
・賽銭箱の入れるところがラッパの口のようになっており、そこに銀貨を入れると「カランカラン」と大きな音がしたのです。金持ちが威勢よくたくさん入れると、その音は周りに大きく響き渡り、人々の注目を集めたことでしょう。
・対してやもめは、当時一番価値が低かった銅貨二枚を入れました。きっと使われている銅も少ない、軽い硬貨だったでしょう。その音は周りには響かなかったかもしれません。しかしその小さな音は、神さまにはしっかりと届いたのです。

（9 月 26 日）「ルカによる福音書 21：7～19」
しかし、あなたがたの髪の毛の一本も決してなくならない。
（ルカによる福音書 21 章 18 節）

・この箇所は「小黙示録」と呼ばれ、終末（この世の終わり）が来ることを暗示する箇所だとされます。わたしは子どもの頃、神さまは「悪いことをすると地獄へ連れていかれる」方だと思っていました。母親の影響が強いのだと思いますが。
・中学から教会に通うようになって、「神さまから隠れないと怖い」という思いが、「神さまが来て助けてくれるから大丈夫」と変わっていきました。神さまはわたしたちを愛しておられるというその一点が、わたしを支えているのです。
・今日の箇所の中の、「髪の毛一本も」という一文にも注目したいと思います。当然これは比喩として語られているのですが、髪の数もご存じでそれすら無くさせないほどわたしたちを思ってくれている神さまを感じていたいと思います。

（9 月　3 日）「ルカによる福音書 14：25～35」
もし、だれかがわたしのもとに来るとしても、父、母、妻、子供、兄弟、姉妹を、更に自分の命であろうとも、これを憎まないなら、わたしの弟子ではありえない。
（ルカによる福音書 14 章 26 節）

・十戒にはこのように書かれています。「あなたの父母を敬え（出エジプト記 20 章 12 節）」。しかしイエス様は弟子の条件として、父母を含む家族や自分の命を憎むことが必要だと語ります。この言葉は、わたしたちに戸惑いを覚えさせます。
・実は聖書の「憎む」という言葉は、わたしたちが日常で用いる「憎む」とは多少ニュアンスが違います。「背を向ける」や「身を引き離す」というイメージです。一番大切なものに向き直りなさいということなのです。
・わたしたちは、イエス様に従い、日々歩んでいます。しかし時には神さまに背を向け、イエス様から身を引き離すこともあるでしょう。そのときわたしたちの信仰は、風味を失った塩のように味気ないものになるのかもしれません。

（9 月　4 日）「ルカによる福音書 15：1～10」
言っておくが、このように、一人の罪人が悔い改めれば、神の天使たちの間に喜びがある。
（ルカによる福音書 15 章 10 節）

・イエス様は二つのたとえを語られます。「見失った羊」と「無くした銀貨」のたとえです。どちらもいなくなった（なくなった）ものが見つかった時に、大きな喜びがあるという物語です。
・羊や銀貨をさがす人とは、神さまのことでしょう。そして羊や銀貨はわたしたちのことです。神さまはどんなにわたしたちが遠く離れていったとしても、捜し、見つけ出してくださるのです。
・それぞれのたとえの最後には、「悔い改め」について書かれています。しかし羊も銀貨も、悔い改めなどしていないように思えます。ただ見つけられ、その手の中に抱えられた。しかしそのように委ねることを、イエス様は「悔い改め」とよばれているのかもしれません。

（9 月　5 日）「ルカによる福音書 15：11～32」
だが、お前のあの弟は死んでいたのに生き返った。いなくなっていたのに見つかったのだ。祝宴を開いて楽しみ喜ぶのは当たり前ではないか。
（ルカによる福音書 15 章 32 節）

・この物語を、自分の信仰生活に重ね合わせる方は多いと思います。神さまの元を離れ、好き勝手生きて来たけれども、ある日神さまからいただいてきた恵みに気づく。そしてもう一度神さまの元に戻ろうと決心する。
・物語では、父親に謝ろうと家に向かう弟を見つけた途端、遠く離れていたにも関わらず走り寄り、抱きしめる父親の姿が描かれます。ずっと弟が帰ってくるのを待ちわびていたのでしょう。その姿を見て手放しで喜ぶ。それがわたしたちに対する神さまの姿です。
・一方兄は、弟が父親に受け入れられたことに腹を立てます。わたしたちの教会はどうでしょう。神さまの方に向き直った人が受け入れられるときに、心から共に喜び祝う教会でありたいものです。

（9 月　6 日）「ルカによる福音書 16：1～13」
主人は、この不正な管理人の抜け目のないやり方をほめた。この世の子らは、自分の仲間に対して、光の子らよりも賢くふるまっている。
（ルカによる福音書 16 章 8 節）

・今日の物語は、「不正な管理人のたとえ」と呼ばれます。ある管理人が、主人の財産を無駄遣いしていることがばれます。そこで彼は主人に借りのある人の証文を書き換え、勝手に借金を減らしてしまいます。主人の損害はさらに大きくなるのです。
・普通に考えたら、とんでもない管理人です。自分のものでもない主人の財産を管理するどころか、浪費していきます。ところが主人はこの管理人の「賢いやり方」（新しい聖書ではこのように訳されています）を褒めたそうです。
・自分の命を守るために全力で不正に走った管理人の姿勢は、決して素晴らしいとは言えないでしょう。しかし中途半端にいろんなものを天秤に掛けて判断するよりも、ある意味潔いのかもしれません。わたしたちの信仰はどうでしょう。

（9 月 23 日）「ルカによる福音書 20：27～40」
神は死んだ者の神ではなく、生きている者の神なのだ。すべての人は、神によって生きているからである。
（ルカによる福音書 20 章 38 節）

・教会では愛する人が天に召されたとき、「神ともにいまして」という聖歌を歌うことがあります。その中で、「また会う日まで」と何度も歌います。たとえ肉体は滅んだとしても、神さまのみ許でいつかまた、語り合うことが出来ると信じているからです。
・サドカイ派の人がたとえで語った女性には、7 人の夫がいました。長男から始まり、次々に子がないまま死んだため、7 人の兄弟すべての妻となった。律法のきまりに従えば、そのようにしなくてはならなかったからです。
・彼女が天に召されたら誰の妻になるのか、それが質問の内容でした。彼らは自分たちの尺度でしか物事を考えられなかったのでしょう。天に召された後のことは、神さまにしかわかりません。神さまにお任せするしかないのです。

（9 月 24 日）「ルカによる福音書 20：41～47」
このようにダビデがメシアを主と呼んでいるのに、どうしてメシアがダビデの子なのか。
（ルカによる福音書 20 章 44 節）

・牧師をしていて、「聖霊って何ですか？」と聞かれることがあります。また幼稚園の子どもに「神さまってどこにいるの？」と聞かれることもあります。「三位一体でどういうことですか？」と難しい質問をされることもあります。
・わたしたちはどうしても、頭で物事を理解したいと願います。「ダビデの子」という枠に、勝手にメシアを押し付けてしまうようにです。神さまにしかわからないことは沢山あるのにもかかわらずです。
・またわたしたちはどうしても、人から良く見られたいものです。見せかけの長い祈りもその中に含まれるそうです。それらの「人の思い」から抜け出すことができれば、どんなにか心が軽くなることでしょう。

（9 月 21 日）「ルカによる福音書 20：9～19」
そこで、ぶどう園の主人は言った。「どうしようか。わたしの愛する息子を送ってみよう。この子ならたぶん敬ってくれるだろう。」
（ルカによる福音書 20 章 13 節）

・今日のたとえを聞いた民衆は、「そんなことがあってはなりません」とイエス様に言いました。「そんなこと」とは、農夫たちが跡取りまでも殺してしまったことでしょうか。それとも殺されるのが分かっているのに、ぶどう園の主人が息子まで送ったことでしょうか。
・このぶどう園の主人とは、神さまのことです。農夫たちに何度裏切られても辛抱強くしもべを送り続け、最後には愛する息子を送ります。殺されるのが分かっているのに、十字架につけられるのが分かっているのに、愛する独り子を送られる神さまのことです。
・人々はしかし、イエス様を捨てました。自分たちだけの力で家を建てようとする、またぶどう園の収穫を自分たちだけのものにする。とても傲慢です。しかしそのときに人々が捨てたイエス様の十字架によってのみ、わたしたちは救われるのです。

（9 月 22 日）「ルカによる福音書 20：20～26」
彼らは民衆の前でイエスの言葉じりをとらえることができず、その答えに驚いて黙ってしまった。
（ルカによる福音書 20 章 26 節）

・先日興福寺会館でおこなわれた「奈良県宗教者フォーラム」に参加しました。今年はキリスト教からの参加はわたし一人でしたが、様々な気づきが与えられた豊かな時間でした。ほら貝が鳴り響く中で、様々な宗教の人たちと共に祈るというのも不思議な体験でした。
・日本のクリスチャン人口は 1%以下だと言われます。その状況で生きていくときに、様々な葛藤を抱えることがあります。神社やお寺に行くこと。お葬式やお墓のこと。家族や親戚との付き合い。町内会の行事や寄付などなど。
・そういったところとは一切関わるな、他の宗教行事には出てはいけないと厳しく言う教派もあるそうです。しかしわたしは、「神のものは神に」という根元さえしっかりしておけば、世俗のことは世俗の中で考えればいいのではないかと思います。

（9 月　7 日）「ルカによる福音書 16：14～18」
そこで、イエスは言われた。「あなたたちは人に自分の正しさを見せびらかすが、神はあなたたちの心をご存じである。人に尊ばれるものは、神には忌み嫌われるものだ。」
（ルカによる福音書 16 章 15 節）

・聖書はファリサイ派の人々を、「金に執着する」と称します。しかしこの当時、富を得ることは神さまに祝福されていることと結びつけられており、「お金を持っている」ことは人々に対し、「あの人は神さまの前に正しい」と思わせる要素となっていました。
・ところがイエス様は不正な管理人のたとえの中で、「神と富とに仕えることはできない」と語ります。自分たちが正しいと思っていたことを、全く共感できないたとえで否定されたのです。彼らはイエス様を嘲笑います。
・イエス様は、わたしたちと神さまとが、正しい関係に戻るようにこの世に遣わされました。神さまは、見せかけの、形だけの正しさは必要とされません。わたしたちが何を大事にしていくのか、それが大切なのです。

（9 月　8 日）「ルカによる福音書 16：19～31」
やがて、この貧しい人は死んで、天使たちによって宴席にいるアブラハムのすぐそばに連れて行かれた。金持ちも死んで葬られた。
（ルカによる福音書 16 章 22 節）

・イエス様の母マリアは神さまのみ心を知ったときに、「マリアの賛歌」を唱えました。「主はその腕で力を振るい、思い上がる者を打ち散らし、権力ある者をその座から引き降ろし、身分の低い者を高く上げ、飢えた人を良い物で満たし、富める者を空腹のまま追い返されます。（ルカ 1：51～53）」
・そこで語られているのは、神さまの前での大逆転です。今日の箇所においても、金持ちとラザロとが、生きている間と死んだ後では全く立場が逆転することが伝えられています。
・それではわたしたちは、どうすればよいのでしょうか。“ラザロ”と共に生きることが大事なのではないかと思います。わたしたちの周りには、“ラザロ”はいませんか。ちなみに「ラザロ」とは、「神さまが助けてくれる」という意味です。

（9 月　9 日）「ルカによる福音書 17：1～10」
あなたがたも同じことだ。自分に命じられたことをみな果たしたら、「わたしどもは取るに足りない僕です。しなければならないことをしただけです」と言いなさい。　（ルカによる福音書 17 章 10 節）

・自分の悪い所を指摘されたり、自分の思い通りにならなかったりしたときに、人はつまずきます。特に教会のような場所でそのようなことになったら、なおさらです。しかしわたしたちは一日に 7 回どころか、一度赦すことさえ難しいときがあります。
・わたしたちには、からし種一粒ほどの信仰すらないということなのでしょうか。からし種は地上で最も小さい種だと思われていました。それがとてつもない大きな木になります。しかしからし種は自分の力で大きくなったのではありません。育てられるのです。
・神さまがすべてを備え、育て、導いてくださる。そう信じ、神さまに全てを委ねることが必要なのではないでしょうか。そして神さまから与えられた賜物を用いて、なすべきことをしていきましょう。

（9 月 10 日）「ルカによる福音書 17：11～19」
その中の一人は、自分がいやされたのを知って、大声で神を賛美しながら戻って来た。そして、イエスの足もとにひれ伏して感謝した。この人はサマリア人だった。　（ルカによる福音書 17 章 15～16 節）

・新共同訳聖書で「重い皮膚病」と訳されていた言葉は、新しい聖書では「規定の病」と変わりました。彼らは宗教上「汚れている」とされ、共同体から追い出され、病気にかかっていない人との接触を禁じられていました。
・その彼らが遠くから、イエス様に憐れみを求めます。イエス様は彼らのそばに行くこともなく、祭司に体を見せに行くように言います。「規定」では祭司が「清い」と判断すれば、元の生活に戻ることが許されるからです。
・彼らは祭司の元に行く途中、いやされました。10 人のうち 9 人は、そのまま祭司の元に急ぎました。社会復帰がそのことによってできるからです。しかし一人のサマリア人だけは、イエス様の元に戻ってきました。神さまを賛美するためです。彼はその結果、本当の救いへと導かれました。

（9 月 19 日）「ルカによる福音書 19：28～44」
「主の名によって来られる方、王に、祝福があるように。天には平和、いと高きところには栄光。」　（ルカによる福音書 19 章 38 節）

・エルサレムに入られるイエス様を、人々は声高らかに神さまを賛美しながら迎えました。しかしこれから一週間も経たないうちに、イエス様は逮捕され、人々は「十字架につけろ」と叫びます。
・人々にとって子ろばに乗るイエス様の姿は、自分たちが望んでいる解放者のイメージとはずいぶん違っていたのでしょう。エルサレムに入ってすぐにクーデターを起こしてくれるに違いないと勝手に思っていたのかもしれません。
・教会には洗礼を受けたものの、教会から離れてしまう人がいます。その原因は様々でしょう。しかし、「イエス様はこんな方ではないと思っていた」という理由であれば、イエス様を自分たちの思い通りに利用しようとした 2000 年前の人と同じなのではないでしょうか。

（9 月 20 日）「ルカによる福音書 19：45～20：8」
彼らに言われた。「こう書いてある。『わたしの家は、祈りの家でなければならない。』ところが、あなたたちはそれを強盗の巣にした。」
（ルカによる福音書 19 章 46 節）

・今日の箇所にある「わたしの家は、祈りの家でなければならない」という言葉は、とても注意深く用いなければならないと思います。イエス様はどのような場面で、誰に対して語ったのかというのがとても大事です。
・子どもたちが礼拝堂でおしゃべりをしていたとします。イエス様は「静かにしなさい。ここは祈りの家だ」と言われたでしょうか。精神を病んでいる人が礼拝堂で大声をあげたとします。イエス様は「出て行きなさい。ここは祈りの家だ」と言われたでしょうか。
・きっとイエス様は、どちらも受け入れたと思います。「いいよ、いいよ」と優しく言われたと思います。それが礼拝堂であり、教会なのです。イエス様はこのとき、神殿で強盗のように商売をしていた人を非難し、追い出されました。そのことを曲解してはならないのです。

（9 月 17 日）「ルカによる福音書 19：1～10」

イエスはその場所に来ると、上を見上げて言われた。「ザアカイ、急いで降りて来なさい。今日は、ぜひあなたの家に泊まりたい。」

（ルカによる福音書 19 章 5 節）

・今日の場面には、徴税人の頭で金持ちのザアカイという人物が出てきます。徴税人はローマ帝国の手先としてユダヤの人々から税を集めていました。彼らは自分の懐を肥やすために決められた以上に取り立ててもいました。だから彼らは裏切り者だと思われていました。

・ザアカイはイエス様のうわさを聞きつけ、一目見てみようと思ったようです。別にイエス様に従う気はなかったでしょう。しかし背の低い彼を、人々は遮ります。嫌われ者のザアカイに道を譲ってくれる人など、そこにはいませんでした。

・ところがイエス様は、先回りしていちじく桑の木に登ったザアカイを見つけ、名前を呼び、「あなたの家に泊まりたい」と言われます。神さまから離れ、人々から相手にされないザアカイにも、救いは訪れました。そしてザアカイはそれを、喜んで受け入れるのです。

（9 月 18 日）「ルカによる福音書 19：11～27」

そこで彼は、十人の僕を呼んで十ムナの金を渡し、『わたしが帰って来るまで、これで商売をしなさい』と言った。 （ルカによる福音書 19 章 13 節）

・マタイによる福音書には、「タラントンのたとえ」という「ムナのたとえ」と似た話があります。しかし 2 つの話には大きな違いが三つあります。一つはお金の単位です。1 タラントンが約 6000 万円なのに対し、1 ムナは約 100 万円です。

・またマタイでは 3 人の僕にそれぞれ違う額を渡していたのに対し、ルカでは全員 1 ムナずつが渡されます。そして 3 つ目です。マタイでは単に「預けた」と書かれていますが、ルカでは「これで商売をしなさい」と命じられています。

・ある人は、この「ムナ」を「み言葉」と解釈します。み言葉は誰にでも同じように与えられますが、それをわたしたちは生かしているでしょうか。布に包んでしまっておいてはいないでしょうか。わたしたちがみ言葉を宣べ伝えることを、イエス様は望んでおられます。

（9 月 11 日）「ルカによる福音書 17：20～37」

「『ここにある』『あそこにある』と言えるものでもない。実に、神の国はあなたがたの間にあるのだ。」

（ルカによる福音書 17 章 21 節）

・「神の国」はいつ来るのでしょうか。その問いに対しイエス様は、「神の国は、観察できるようなしかたでは来ない」と言われます。生駒山上遊園地や奈良ドリームランドのように、誰もがわかる形として見ることはできないということです。

・また神の国は、「死後の世界」ということでもありません。「神の国はあなたがたの間にある」とイエス様が言われているからです。この「間にある」ということについて、少し考えてみましょう。

・わたしたちが誰かとの交わりの中で神さまの愛を分かち合った時、そこに「神の国」がやってくる。わたしたちが誰かの肩を抱きながら一緒に涙を流した時、そこに「神の国」がやってくる。そういうことなのかもしれません。

（9 月 12 日）「ルカによる福音書 18：1～8」

まして神は、昼も夜も叫び求めている選ばれた人たちのために裁きを行わずに、彼らをいつまでもほうっておかれることがあろうか。

（ルカによる福音書 18 章 7 節）

・この「やもめと裁判官のたとえ」は、気を落とさずに絶えず祈らなければならないことを教えるために、イエス様が弟子たちに対して語ったものです。

・聖書の別の箇所には「あなたがたの父は、願う前から、あなたがたに必要なものをご存じなのだ」と書かれているため、自分の願いを必死になって祈るのはあまりよくないと考える人がいます。しかし果たしてそうでしょうか。

・自分の願いがかなえられるまでしつこく何度でも裁判官の元に行ったやもめのように、わたしたちの祈りもしつこくてよいのです。神さまはその叫びを、いつも待っておられます。神さまはわたしたちをほうってはおかれません。

（9 月 13 日）「ルカによる福音書 18：9～17」
自分は正しい人間だとうぬぼれて、他人を見下している人々に対しても、イエスは次のたとえを話された。（ルカによる福音書 18 章 9 節）

・「自分は正しい人間だとうぬぼれて、他人を見下している人々」とは誰のことでしょう。イエス様のたとえにはファリサイ派と徴税人が出てきますので、「ファリサイ派」だと多くの人は考えます。するとここで、今日のメッセージは届かなくなってしまいます。
・聖書を読んでいて、「これは自分に対して言われているのではない」とか、「これはあの人に対して言われているんだ」とか考えることと、「この徴税人のような者でないことを感謝します」というファリサイ派の人の思いは同じなのです。
・大切なことは自分の罪を自覚し、ただひたすらに神さまの憐れみを求めることです。わたしたちは乳飲み子のように、一方的に恵みを与えられなければ生きていけない、そんな存在なのですから。

（9 月 14 日）「ルカによる福音書 18：18～30」
しかし、その人はこれを聞いて非常に悲しんだ。大変な金持ちだったからである。（ルカによる福音書 18 章 23 節）

・イエス様に金持ちの議員が質問します。「何をしたら永遠の命を受け継ぐことができるか」と。彼は少年の頃から律法を守っていました。また金持ちであるため、神さまの祝福が与えられていると思っていました。
・彼は多分、周りの人からも羨ましがられるような人だったのではないでしょうか。しかし彼は、不安を抱えていたようです。「本当にこのままで永遠の命を受け継ぐことが出来るのだろうか」。彼はイエス様から「あなたは大丈夫」と言って欲しかったのでしょう。
・しかしイエス様は、財産を売り払い、貧しい人々に分けてあげるように言われました。金持ちで律法も守る彼は、神さまからの恵みや喜びを一人占めしていたのです。そうではなく周りの人と、その喜びを分かち合いなさいとイエス様は促されたのです。

（9 月 15 日）「ルカによる福音書 18：31～34」
十二人はこれらのことが何も分からなかった。彼らにはこの言葉の意味が隠されていて、イエスの言われたことが理解できなかったのである。（ルカによる福音書 18 章 34 節）

・ルカ福音書の中で、イエス様がご自分の死と復活について語られたのは三度目です。（マタイ、マルコもそれぞれ三度語られました）。イエス様はこれらの言葉を、12 人に対して語られています。12 人とはいわゆる 12 弟子（12 使徒）のことです。
・12 人はイエス様の 12 弟子というくらいですから、とても霊的で、素晴らしい人物だと想像してしまいます。しかし聖書を読んでいくと、人間的なところばかりが目につきます。今日の箇所でも、彼らはイエス様の言われたことを理解することができませんでした。
・すべてのことは、復活のイエス様に出会ったときに明かされ、それまでは隠されているのです。自分で精進して立派な弟子になっていくのではなく、復活のイエス様との出会いによって変えられていくのです。それは、わたしたちも同じことです。

（9 月 16 日）「ルカによる福音書 18：35～43」
盲人はたちまち見えるようになり、神をほめたたえながら、イエスに従った。これを見た民衆は、こぞって神を賛美した。（ルカによる福音書 18 章 43 節）

・聖公会の礼拝では参入（礼拝の中の最初の部分）で、「①栄光は～」、「②主よ、憐れみを～」、「③ほめ歌え～」のいずれかを歌い（あるいは唱え）ます。しかしチャントを用いる場合は、②の横文字バージョン「キリエ」を使っている教会が多いようです。
・そもそも「キリエ・エレイソン」の意味が分かって歌っているのか、疑問に思うことがあります。その意味は今日の聖書にある、「ダビデの子イエスよ、わたしを憐れんでください」という叫びと通じます。
・礼拝の中で、わたしたちも目が開かれるようにと「キリエ」を唱えましょう。叫んでもいいかもしれません。そして礼拝の終わりには、喜び、ほめたたえながら、「派遣」へと導かれていきたいものです。